

## 扁鵲の画像について

石田秀実

『史記』扁鵲倉公列伝に描かれた扁鵲の所業が、到底一人の人間のものとは思えないことから、「扁鵲」という名称は、名医の代名詞といったものであり、様々な時期に様々な「扁鵲」がいたのだ、と言われたり、いくにんもの名医の伝説が、一人の「扁鵲」という名医の伝説として伝えられたのだ、とかいった想像がなされている。

一方、山東大学の劉敦愿によって、後漢期に制作された画像石のいくつかが、「扁鵲針灸行医図」である、と主張されて以来、扁鵲は半鳥半人（正確には人面鳥神）の神物をトーテムとする医家の集団の名称である、とする説が流布している。もちろんこの説には、とりわけそのトーテムズムとの安易な結合に対して、批判もなされてはいる。とはいえ、この画像を扁鵲学派（なるものがあつたと仮定して）の、当時におけるなんらかのシンボルと見る考え方は、か

なり有力なようである。前述した『史記』扁鵲倉公列伝から窺える、扁鵲の複数性をもうまく説明するからである。けれども、この画像を『史記』の記載とダイレクトに結びつけることには、かなりの疑問がある。まず第一に、

『史記』の伝記には、確かに長桑君という鬼神的な人物（『史記』留侯世家の倉海君、『後漢書』方術伝の東海君・葛陵君など、皆鬼神に特有の名称である）がおり、五蔵を洞見しうるようにするなどの神秘的記述があるものの、扁鵲自身については、何ら神格化の形跡が見られないことがある。周知のごとく、『史記』の扁鵲像は、「六不治」の一に、「巫を信じて医を信ぜず」が挙げられるような、いわば合理的な傾きを有するからである。

第二に、問題の画像石は後漢時代のものであり、共に描かれていた神話的表象も、西王母や東王公、四獣など、この時期に特徴的なものが多い。これらの神話表象の内、人面鳥神の行針者のみを、トーテム的なものと取ることの非は言うまでもあるまい（トーテムズムの概念自体が、疑問視されていることは、周知のことである）。またこれらの画像が、兩漢の際から後漢、更に三国期にかけての、共同体の崩壊

と社会不安に伴う、様々な新しい神格の成立や、古い神話的表象の新しい意味づけに伴って描かれたものであることを思えば、前漢初期に描かれた『史記』の扁鵲像との間隔は、いわば当然のことなのではないだろうか。

第三に、扁鵲が神格として登場する文献の存在が挙げられる。いわゆる『黄帝蝦蟇經』である。『隋書』経籍志に著録され、『抱朴子』逸文に見える『蝦蟇圖』なども関係するであろうこの書について、多紀元簡は、「まさに漢人の撰する所なるべし」という(『医籍考』)。実際この經に記される六甲日神や血忌については、『論衡』譏目篇などに既に見えており、書自体の成立がやや後れるものだとした場合においても、そこに記された内容を後漢頃のものとする取することに、問題はないように思われる。

さて本書の「推天医天德生氣法」第七に記される、神格化された扁鵲は、日月(即ち陰陽)相会する神たる月将、生気中の生気の神格化としての天医などと共に、天に在って人の治病を主り、能く死者を蘇生せしめるものである。呪術や治療上の方位決定に現われるその神格は、トータム神といったものではなく、生気や不死の象徴といった性格

を持つ。この時期にクローズアップされる西王母を中心とする神格が、不死の薬を中心とした、生命の源泉としての性格を濃厚に持つことを考えるならば、その図像中に扁鵲が登場することは極めて自然なことである。

以上のように考えるならば、神格化され、天上界を往来する扁鵲の画像は、老子をはじめ様々な人物が神格化されていった、前後漢の境から後漢にかけて形成された、神的扁鵲像を反映するもの、と考えられるのではないだろうか。

人面鳥身のその姿については、森田傳一郎らによって指摘された、砭石と鳥、とりわけ鵲との関係の他、東方に在って人の寿を司る人面鳥身の神、「苟芒」との関係も考えておかねばなるまい。前漢初期の出土品中に出てくる人面鳥身の神は、扁鵲ではなくこの「苟芒」であり、竜舟とおぼしきものに乗って昇仙してゆく墓主人の下方で、墓主人を守るかのように描かれている、空を飛ぶ動物を陽の物とする考え方も、なんらかの影響を与えていよう。

いくつかの伝説と神話的表徴から構成された神格としての扁鵲像には、窮桑の地との関係、不死の薬、施針による

死者の蘇生など、もとになった表徴が有していた様々な性格が保たれているようである。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究室)

## 扁鵲 其の二

家本誠 一

史記扁鵲伝には三つの症例が記されている。

- 一、趙簡子 不知人
- 二、魏太子 尸厥
- 三、齊桓侯 病在骨髓

この症例を検討し、素問の記載と対照して、扁鵲伝の医学の性格を明らかにする。

病位の意義

齊桓侯例の要点は次表の様である。

病位	腠理↓血脈↓腸胃↓骨髓
治方	湯熨 鍼石 酒醪 不治
病勢	輕症 中等 重症 死症

病気には、外邪に感じて起るものと、邪によらず、精神的ストレスなどにより内部から発症するものがある。後世の所謂外感と内傷である。外邪が形体を侵襲する経路は